

## 国際研究フォーラム 「ミュージアムで学ぶ宗教文化—デジタル時代のチャレンジ—」

本フォーラムは、2014年9月27日(土)に、日本文化研究所の主催、科学研究費補助金基盤研究(B)「宗教文化教育の教材に関する総合研究」ならびに宗教文化教育推進センター(CERC)の共催により、本学常磐松ホールにて開催された。13時から5時間近くにわたって行われ、約120人の参加があった。

本フォーラムの趣旨は、日本には5千もの広義の博物館があり、当然、宗教文化に関わる展示も少なくないなか、博物館・美術館などを、宗教文化を教育し学習する場としてどのように活用できるのか、というものである。

そこで、発題者には実際にミュージアムを日本文化・宗教を学ぶ授業において活用したり、展示作品を授業で取り上げている方々をお招きし、具体的事例について報告してもらった。パネリスト間の情報交換、また問題点についての認識を共有することで、今後の活用方法の展開について議論した。

とりわけ本格的なデジタル情報時代を迎えている現代の状況に鑑み、新しい情報技術の活用や情報発信の方法などについても、具体的な事例に即して議論を展開した。

2014年度には、國學院大學博物館、日本文化研究所などが中心になり、文化庁が推進する地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業に応募して採択された。テーマは國學院大學博物館が中心となった「東京・渋谷から日本の文化を発信するミュージアム連携事業」である。フォーラムはこの事業との連携も意図していた。

まずフォーラムの冒頭で、司会の井上順孝(國學院大學)が企画の趣旨を説明した。前

述のように、デジタル時代において博物館に所蔵された学術資産をどのように発信・活用できるかについて、アイデアを出し合いたいとした。

第1セッションでは、高橋徹氏(株式会社ATR Creative)が「地域文化の発見的伝承—スマートフォン時代の文化資料デジタルアーカイブの活用—」をタイトルとして発題し、多くの具体事例を紹介しながらの説明がなされた。高橋氏は、情報工学を専門としており、これまでに産学連携によるミュージアムにおけるデジタル技術の開発・活用をプロデュースしてきた経験を有する。

高橋氏はまず、仏像などの伝統的な宗教文化はユーザインタフェースデザインのきわめて優れた先例と捉えられ、そうした宗教文化とITとをどうつなげられるかを構想してきたことに触れた。

これまでの取り組みの例として、ミュージアムの所蔵資料の画像をタッチパネルで検索できる「イメージファインダ」や「時空間資料画像表示システム」などが紹介された。どちらも画像から直感的に資料にアクセスでき、検索のみではなく、実際の資料の所蔵場所に誘導したり、学術研究からの要請にも応えるものである。

次に、スマートフォンアプリ「ちずぶらり」などの例を挙げた。これは、さまざまなイラストを地図上に現在地表示できるアプリであり、古地図などと連動させることで、史跡や社寺などを歩きながら歴史を体感できる。観光マップや街歩きのイベントなどと連携することで、参加者の書き込みによって情報が蓄

積されるような仕組みも持つ。

こういった情報システムやアプリの具体例が説明され、そのデザインの背景と活用可能性について論じられた。

第2セッションでは、上西亘氏（國學院大學）が、「神道・神社博物館の課題と展望—インターネットを中心とした博物館情報・メディア構築について—」をタイトルとして発題した。上西氏は、國學院大學博物館の前身の伝統文化リサーチセンター資料館で嘱託学芸員を務めた経験があり、関連事業の『神社博物館事典』（雄山閣、2013年）の編纂に関わっている。

同氏が定義した「神社博物館」とは、「神社に付属している展示施設」のことである。本来は各神社の神宝などの保存目的だったが、徐々に社会に公開・発信することが目指されるようになったことを紹介した。

2009年からのプロジェクトでは、全国の神社付随展示施設の悉皆調査が行われているが、それに基づいて前掲事典が刊行されたわけである。

その過程において、同事典の資料編のウェブ版が作成され、現在もアーカイブとして残されている。付加すべき情報の余地は大きいですが、これが神社博物館のデジタルデータベースのプロトタイプとして機能しており、ミュージアム連携構想につながる基礎データであると言える、と述べた。

神社博物館は、比較的大きなところではウェブコンテンツなども充実させて独自に発信を強めている一方で、神職が社務と兼任であって注力する余裕がないところでは細々と維持されている、といった二極化が観察される。そのなかで、今後、國學院大學博物館が果たす役割の可能性は大きいのではないかと。本学が、神社付属の博物館施設のみならず、仏教・キリスト教関連展示施設など、総合的に宗教文化を学ぶことのできるポータルサイトとなるようなコンテンツのグランドデザイ

ンを構築できれば、研究成果の教育・社会への還元という点においても理想的と思われる、と述べた。

第3セッションでは、アラン・カミングス Alan Cummings 氏（University of London, UK）が、「日本文化史の授業とミュージアム—大英博物館の場合—」をタイトルとして発題した。初年次教育においてミュージアムを理解する方法について、体験を踏まえて紹介した。カミングス氏は、ロンドン大学で日本文化史コースを教え、大英博物館を自らの授業で活用しているのである。

大英博物館の日本ギャラリーは、3万点ほどのコレクションに基づき、3部屋を用いて、よく企画された繊細で知的な構成で展示がなされている。

カミングス氏は、毎年2回ほど学生を連れて行くが、各回の目的は異なっている。一度目は、見てわかる性質のもの、すなわち、どのようなものが展示してあり、その展示物は学生が授業で学習したこととどのように関連しているかをつかむためであって、学生は関心をかきたてられたり、驚嘆を覚えたりする。

しかし二度目は、展示品のポリティクス、特に展示品に関して博物館が構築する「物語」を、学生に考察させるためだとする。展示物の選び方や周辺の文字データを通じて、異文化である日本についてどのようなイメージを構築しようとしているのか、その手法はどのようなものか、そのイメージは学生の既存のイメージとどう関連しているのか、といったことを考えさせるようにしているのだという。

また、授業の最終回では、現代日本に対する理解に立ち戻り、太平洋戦争におけるニューギニア戦線や、それに関する靖国神社の遊就館での展示に主に焦点を当てている。ここでは、遊就館で見られるキュレーションや展示の戦略を通じて、記憶が構築され、語られる手法について、大英博物館の物語と比較しながら検討するよう学生に促している。

いずれにしても、博物館の教育への活用には、こうした展示方法・視点・戦略などをめぐる教員の側の計画的な努力が必要だ、と述べた。

第4セッションでは、サミュエル・モース Samuel C. Morse 氏（Amherst College, USA）が、"Religious Art, the Museum, and the Digital Age"のタイトルで発題した。モース氏は、日本の宗教美術史を研究し、大学で博物館学のクラスを担当している。

仏教美術などの宗教的オブジェは、元来はそれらが用いられる文脈によって意味を与えられているが、ミュージアムではこれらの文脈は沈黙させられてしまうという点に注意を促した。

モース氏は、仏教美術作品によっていかに人々が情動的・情緒的に動かされるのかを示すべく、宗教的展示品をそれが実際に使われていた場面とともに展示することを企図した企画展「Object as Insight: Japanese Buddhist Art and Ritual Practice」を、1992年にニューヨーク・カトナ美術館とボストン美術館で開催した。そこでは、本堂・荘厳具などのインスタレーションとともに、内部で法要を行うなど、日本における宗教的空間や信仰儀礼の独特の性質を理解してもらえよう努めたという。

研究の世界がデジタル情報技術を受容した現在、こうした試みの可能性はさらに広がっている。モース氏が現在関わっているプロジェクトにおける「デジタル人文学」の趣旨は、「芸術家や学者が新しい技術を学術研究、教育、創造的な仕事に取り入れるのを助けること」などであり、それによる学術分野の横断と人々の結びつきの変容が目指されている。ただしそれでも、デジタル情報技術で達成されるものと、博物館の展示とは全く異なるものであり、コンテキストを重視しつつ、「博物館と共に仕事すべき」と述べた。

4つのセッションに続いて、牧野元紀氏（公益財団法人東洋文庫）より4氏の発題に対するコメントがなされた。牧野氏は、東洋文庫

ミュージアムにおいて展示に関わっている。

各コメントの詳細と応答については省略するが、全体としては、歴史資料をミュージアムなどで扱う際の差別問題や歴史問題などへの配慮の問題、実際にミュージアムに来館したり、ウェブコンテンツ・アプリなどを利用する人々の間での情報弱者・強者のギャップの問題、貴重な美術品を所蔵していることを公言することへの躊躇の問題、欧米のミュージアムにおける学術的展示というよりアート化が進んでいる傾向、ミュージアムにおいて西洋美術が優位であるなかで東洋・日本に目を向けてもらうための工夫、などについて、それぞれ鋭い指摘がなされた。

その後の総合討議では、フロアから多くの意見や質問が出された。主な議論としては、デジタル技術者を育成する体制の問題、複写・複製と実物との関係の問題、オープンデータの活用可能性、アプリの開発やデジタル技術を導入する際の予算的問題、などが提起され、かなり突っ込んだ応答がなされた。

最後に司会の井上から、さまざまな領域の専門家によるネットワークを構築することの必要性があらためて指摘され、今後の協力継続への期待が述べられた。

なお、本フォーラムの様子は、60分に編集され、CSのスカイパーフェクTV！529チャンネルにて、2014年11月4日（火）21時～22時、同11日（火）21時～22時の2回にわたり放映された。

（井上順孝）

